

博士論文要旨

学籍番号 1207002	氏名 奥村 美奈子
論文題目	終末期がん患者の在宅療養支援体制の構築に関する研究
<p>目的 本研究の目的は、終末期がん患者の在宅療養および在宅での看取りの現状と課題を明らかにすると共に、終末期がん患者の在宅療養支援体制の構築と充実にに向けた対策を検討し、そのあり方を提言することである。</p> <p>方法 研究1は、医療機関に対する質問紙調査を実施し、医療機関における終末期がん患者の在宅療養支援体制の現状と課題を明らかにし、体制強化に向けた方策を検討した。研究2は、訪問看護ステーションに対する質問紙調査を実施し、終末期がん患者の在宅療養および在宅での看取りに関わる訪問看護ステーションの活動の現状と支援を行う上での課題を明らかにし、課題解決の方策を検討した。研究3は、病棟・外来・退院支援部門に所属する看護職に面接調査を実施し、終末期がん患者の在宅移行の現状、必要な看護活動、看護上の課題を明らかにするとともに、終末期がん患者の在宅移行・在宅療養支援の充実にに向けた方策を検討した。研究4は、終末期がん患者の在宅療養支援体制づくりを実践し、終末期がん患者の在宅療養支援体制づくりに必要な事柄を明らかにした。以上、研究1～4の結果を統合し、終末期がん患者の在宅療養支援体制の構築と充実にに向けた対策のあり方を提言する。</p> <p>結果</p> <ol style="list-style-type: none">1. 終末期がん患者の在宅移行・在宅療養および看取りを支援する上での病院の課題として、退院支援部門・相談部門における看護職の配置や担当者を検討する必要性、緩和ケアチームの活動充実にに向けた取り組みの必要性が明らかになった。2. 終末期がん患者の在宅療養・在宅での看取りを支援する上で整備すべき事柄として、【後方支援病院との連携強化】【早期の訪問看護導入】を含む12項目が得られた。3. 終末期がん患者の在宅移行・在宅療養および看取りを支援するために必要な看護実践能力として、【今後に関する患者・家族の意思を確認し、それを尊重した支援を行う】【患者を生活者の視点で捉え支援する】を含む11項目が得られた。4. 終末期がん患者の在宅移行の推進には、緩和ケアチームの活動の浸透、終末期がん患者の看護に携わる看護職の認識の変化が影響していた。また、病院の看護職と地域で活動する看護職との連携や診療所で活動する看護職に対し学習の機会を提供する必要性が確認された。 <p>考察 終末期がん患者の在宅移行・在宅での看取りを実現するためには、対象者を生活者として捉え、限りある時間の中で日々の看護を的確に実践するとともに、終末期がん患者への支援能力を高めるために看護職の教育を充実させる必要がある。また、医療機関においては退院支援部門の設置をする等、地域の看護職との連携が円滑に進むよう体制を整備することが重要である。</p>	

平成 21 年度博士論文審査結果報告書

主査	北山三津子
副査	田村正枝
副査	黒江ゆり子

平成 21 年度博士論文の審査及び最終試験を実施した結果は、次のとおりです。

記

学籍番号：1207002

氏 名：奥村 美奈子

審査結果： 1 . 合格 2 . 不合格 3 . 保留

[審査結果要旨]

(800 字 ~ 1,000 字)

本研究（題目「終末期がん患者の在宅療養支援体制の構築に関する研究」）は、終末期がん患者の在宅療養および在宅での看取りの現状と課題を明らかにするとともに、終末期がん患者の在宅療養支援体制の構築に向けた取組みを実践・評価し、それらをふまえて支援体制の充実にに向けた対策のあり方を追究したものである。

終末期がん患者の在宅療養支援体制と在宅での看取りの現状と課題を把握するために岐阜県の医療機関と訪問看護ステーションを対象に質問紙調査を実施し、退院支援部門・相談部門における看護職の配置、緩和ケアチーム活動の充実に、後方支援病院との連携強化、および早期の訪問看護導入等が課題であることを明らかにした。

また、在宅移行および在宅療養支援の充実にに向けた方策を検討するために看護職（病棟・外来・退院支援部門）に面接調査を行ない、患者・家族の意思の確認、および生活者の視点で捉えた支援の充実に重要であることを示した。さらに、地域医療を中心的に担う医療機関を素材として在宅療養支援体制構築のために、看護職の意識向上への働きかけ、事例検討会の開催、病院と地域との連携等の取組みを病院看護職とともに進めた。これらを通して地域における多要因からなる在宅療養支援体制のモデルを示した価値ある論文である。これらの過程を的確にデータ化し分析し考察しており、取組み全体として評価できる。

本研究科の倫理基準に基づいており、倫理上の問題もなく、論旨に一貫性があり、適切に記述されている。

なお、審議会議のうち2回は当該学生が出席し、教員からの口頭試問に回答し、かつ直接に指導を受けた。この過程を最終試験として合格とした。

以上のことから、博士論文と認め、合格とする。